

北九州市立大学

文学部 紀 要

第 89 号

カイン、ホアキン、ヨアキム
—ミゲル・デ・ウナムーノ『アベル・サンチェス』をめぐって—
富 田 広 樹 ……………23

北九州市立大学文学部
比較文化学科
2 0 1 9

JOURNAL
OF
THE FACULTY OF HUMANITIES
THE UNIVERSITY OF KITAKYUSHU
No. 89 March 2019

יהוֹאֲקִיִּן, Joaquín,

En torno a *Abel Sánchez* de Miguel de Unamuno

Hiroki TOMITA23

The Department of Comparative Culture
The Faculty of Humanities
The University of Kitakyushu
2019

カイン、ホアキン、ヨアキム

—ミゲル・デ・ウナムーノ『アベル・サンチェス』をめぐる—

富田 広樹

しかし、カインは弟アベルに話しかけた。「野に行こうではないか。」
そして、ふたりが野にいたとき、カインは弟アベルに襲いかかり、彼を殺した。
「創世記」四・八

要旨

ミゲル・デ・ウナムーノの小説『アベル・サンチェス』は作者自身によっても陰鬱極まりない作品として評されている。一見なんの救いもないこの作品において、嫉妬に苦しむカインとしての役割を負わされている登場人物ホアキン・モネグロの固有名にあらためて注意を払うことで、結末における一場面を希望あるものと解釈することが可能になる。

キーワード

ミゲル・デ・ウナムーノ、『アベル・サンチェス』、カイン、ヨアキム

Resumen

Abel Sánchez fue calificada por su propio autor, Miguel de Unamuno, como la más trágica de las novelas que había escrito. Sin embargo, la consideración detenida del nombre de pila de su protagonista, Joaquín Monegro, estigmatizado como un nuevo Caín bíblico, abre el camino a una interpretación de características esperanzadoras de la última escena de la obra.

Palabras clave

Miguel de Unamuno, *Abel Sánchez*, Caín, Joaquín

はじめに

さる二〇一八年は日本とスペインの外交が樹立されて一五〇周年、スペインの名門サラマンカ大学が創立されて八〇〇周年という節目の年にあたった。それを記念して駐日スペイン大使館では九月一二日から一〇月九日まで「いま、ウナムーノを問う」と題する展覧会が開催され、これに歩調

をあわせる形で彼の長大な詩篇『ベラスケスのキリスト』の翻訳と、佐々木孝の評論『情熱の哲学 ウナムーノと「生」の闘い』（かつて刊行された『ドン・キホーテの哲学』の増補改訂版）が法政大学出版局より出版された¹。

佐々木は装いを新たにした自著のまえがきで、日本におけるウナムーノの紹介は「一九七〇年代、法政大学出版局の『ウナムーノ著作集 全五巻』をもって本格化したかに見えたが、その後さして進展を見せぬまま世紀を越えた」と書いている²。とするなら、スペイン内戦のはじまりとともに混迷の底にあった祖国スペインを憂慮しながら一九三六年一月三十一日に世を去ったミゲル・デ・ウナムーノの存在は、八〇年以上の時を経て日本で再び脚光を浴びるようになったということだろうか。

ウナムーノはその生涯に数多くの書物を残した。そこには哲学的な著作、評論、小説、詩、戯曲、そして膨大な量の論考の数々が含まれる（いまだ全集に収められずにいるものもけっして少なくはない）。そのいずれもが相互に関連し、反復をしながら巨大なウナムーノのテキスト宇宙を生み出していることを経験的に知るならば、それぞれを個別の作品として検討すること以上に、イントラテキスト的な読みこそが実践されなければならないことが痛感されよう。だが、そのいっぽうで、個別の作品にかんして言うならば、判で押したような評価、あるいはすでに定まったとされる評価に則った読みもまた厳につつまねばならない。それは先に挙げたイントラテキスト的な読みの可塑性をおおいに損なうものであるし、かつまたウナムーノの言い方を借りるならば、永遠の生を奪うことにもなるからである。本稿では、本邦未訳の小説『アベル・サンチェス』について検討する。ウナムーノ自身によっても、また批評家、読者によっても暗鬱極まりないとされるこの作品の末尾に、ひとつの贖罪がおとずれていることを積極的に評価しうる根拠を提示したい。

『アベル・サンチェス』

『アベル・サンチェス』は一九一七年に出版された後、ウナムーノ自身による改稿を経て一九二八年にその第二版が上梓された。今日われわれが読むことのできるこの作品テキストは、そのほとんどがこの第二版に依拠している。

この作品については、ウナムーノ自身が『三つの模範小説と序』の「序」において「恐らく〔彼の小説作品〕すべての中でもっとも悲劇的であろう」³と評し、生涯の終わりに近づきつつあった一九三五年二月に記された『霧』の第三版によせた『『霧』についての覚書』では「激情の物語、

¹ 本稿執筆中に佐々木孝氏の訃報に接した。ウナムーノやオルテガなどスペインの哲学者の翻訳、紹介に尽力された氏のご冥福をお祈り申し上げる。

² 佐々木孝『情熱の哲学 ウナムーノと「生」の闘い』法政大学出版局、二〇一八年、v ページ。

³ ミゲル・デ・ウナムーノ「三つの模範小説と序」鼓直、杉山武訳、『ウナムーノ著作集 4 虚構と現実』法政大学出版局、一九七四年、二五二ページ。

わがスペインのもっとも恐るべき共有の腫瘍の奥深くに私のメスを突き刺して成し遂げた悲痛極まりなき実験⁴と呼んだ。さらには、当の作品の第二版に寄せた序において「読み返したくはなかった物語」と呼び、その作品の憂鬱な陰気さについて「読者は悪臭を放つ人間の魂の深い裂け目にメスをあてて膿汁を吹き出させることを望みはしないものだ⁵」と、自身が晩年に繰り返すことになる比喩を用いている。

作品は三八の章とそれに先立つ簡素な注記で構成され、さらに第二版への序が巻頭に置かれるのが出版上の慣習となっている。興味深いことに、筆者が確認することのできたいくつかの英訳では、ことごとくこの第二版への序が欠落していた⁶。しかしウナムーノが序文というものに認めた重要性、かつまたそれがひとつの小説を構成する場合さえもあるという作者に特有の事情を考慮すれば⁷、第二版への序を欠く『アベル・サンチェス』は片手落ちと言えるだろう。

ウナムーノのすべての小説中でもっとも悲劇的な作品のあらすじはつぎのようなものである。ホアキン・モネグロとアベル・サンチェスは幼馴染であるが、周囲の人々の好意を勝ち取るのはつねにアベルであった。ホアキンは自身が恋する従姉妹エレナをアベルに紹介するが、ここでもアベルは彼女を勝ち取り結婚することとなる。ホアキンは激しい嫉妬に苛まれ、それはさまざまな局面で繰り返される。長じてアベルは名声ある画家となり、ホアキンは医師となる。エレナへの恋破れたホアキンは自身が臨終に立ち会った患者の娘アントニアと結婚する。それぞれの夫婦に子供が生まれる。父親と同じ名を持つアベルの息子は医者を目指し、ホアキンのもとで修業を積む。ホアキンの娘ホアキナは父親の得体の知れぬ陰鬱な心情を察して修道院に入ることを決意しかけるが、ホアキンがこれを説得し、まるで自らの息子であるかのようにその医師としての成長に心を砕いていたアベルの息子と婚姻を結ばせる。彼らの結婚によってホアキンはかつての薄暗い感情から解放され、

⁴ ミゲル・デ・ウナムーノ「霧」高見英一訳、『ウナムーノ著作集4 虚構と現実』法政大学出版局、一九七四年、一八ページ。訳文では「激情」は「受難」と訳されている。原文は *pasión* でありどちらとも訳せるように見えるが、後述するように『アベル・サンチェス』が嫉妬という激情によって生涯にわたり苦しむ男の物語であることから、ここではそのように改めた。むろん、それがひとつの「受難」であることにはなんの変わりもない。

⁵ Unamuno, Miguel de. *Abel Sánchez*. Ed. Carlos A. Longhurst. Madrid: Cátedra, 1995, pág. 79. 『アベル・サンチェス』からの引用はこの校訂版に基づいて訳出する。外国語文献からの引用も、特に記載のない限りにおいてすべて拙訳による。

⁶ Unamuno, Miguel de. *Abel Sánchez and other stories*. Tr. Anthony Kerrigan. Washington D. C.: Gateway Editions, 1956; Unamuno, Miguel de. *Abel Sánchez*. Tr. John Macklin. Oxford: Aris & Phillips, 2006; Unamuno, Miguel de. *Abel Sánchez: Story of a passion*. Tr. s.d. [¿Marciano Guerrero?]. CreateSpace Publishing [On-demand publishing service of Amazon], 2014.

⁷ 「三つの模範小説と序」の「序」において彼は、その序もまた一つの小説であり、さらには小説に関する小説、小説論の解説であるとさえ述べている。序文という特権的な場において発揮されるこのような文学的実験はミゲル・デ・セルバンテス以来のものであり、ウナムーノ自身もそのユニークな批評『ドン・キホーテとサンチョの生涯』を執筆するほどにセルバンテスに傾倒していたことを考えても、第二版への序の価値は強調してもしすぎることはないだろう。なお、セルバンテスの名は『アベル・サンチェス』第三章にあらわれる。

新しい人生を歩み始める。若いふたりの間には息子が生まれ、ホアキンと名づけられる。老境に入ったホアキンはアベル（父）が孫の歓心を買って幼な子を彼から奪おうとしているという考えにとらわれ、アベルと口論になる。その最中ホアキンがアベルの首に手をかけると同時にアベルは持病の心臓病の発作を起こし息絶える。それからまもなくホアキンもまた自身の生涯を嘆きながら世を去る。

作品がもたらす陰惨な読後感に比して、物語の筋はきわめてシンプルである。ふたりの幼馴染の生涯における出来事を、ホアキン・モネグロを中心に描き出しているに過ぎない。作品が最初に発表された時から数えて一〇〇年以上の時を閲していることもあり、『アベル・サンチェス』をめぐってはすでに同時代のスペイン社会の状況やウナムーノ自身を取り巻いた状況から出発する伝記的、あるいは精神分析的な観点から批評がなされてきた。またその影響関係や、語りの構造、作中に引かれ主人公ホアキン・モネグロに強いインパクトを与える作品『カイン』を著したバイロン卿との比較研究も現れている。しかしここでは、従来の批評において看過されてきた問題を提起し、ウナムーノの小説すべての中でもっとも悲劇的であり、悲痛極まりなき実験であるところのこの作品に希望の光を見出すことが、作者の断言に抗してなお可能であることを示したい。そうすることで以後の『アベル・サンチェス』研究、解釈に資するところが皆無ではないと考えるがゆえである。

ホアキン、カイン、ヨアキム

この小説の初版は概ね、スペイン国内にあってみごとな成功をおさめなかった。ひとえに、私自身が描き、彩色に心を砕いた陰気で憂鬱な寓意的なその表紙が、それを阻んだのであるが、もしかすると物語自体の憂鬱な陰気さがそれを阻んだのかもしれない⁸。

第二版への序文の言葉どおり、『アベル・サンチェス』の初版は、作品を手にとることさえ躊躇させるような表紙で飾られていた。画面左上部に描かれた月のような円の中にはギリシア語で Φθόνος と記されている。プトノスとはその神話における嫉妬の擬人化したものにほかならない。嫉妬こそは、哲学者そして作家、詩人としてのウナムーノの生涯に通底する一大テーマであった。そしてその問題の根底にあったのは、旧約聖書の「創世記」第四章にかたられる地上最初の殺人、すなわちカインとアベルの逸話に対する関心である。それはカルロス・クラベリアの論文において縷説されているとおり、すでに最初期の著書『風景』（一九〇二年）において現れ、『抒情ソネット

⁸ Unamuno, Miguel de. *Abel Sánchez*. Ed. Carlos A. Longhurst. Madrid: Cátedra, 1995, pág. 79.

カイン、ホアキン、ヨアキム
—ミゲル・デ・ウナムーノ『アベル・サンチェス』をめぐって—



『アベル・サンチェス』初版（一九一七年）の表紙（部分）。スペイン国立図書館蔵。
左上にフトノス、右上にカインとそれぞれギリシア語、ヘブライ語で記されている。
右下のモノグラムは作者の頭文字 M と U を組み合わせたものだろう。

のロサリオ』（一九一〇年）、『生の悲劇的感情』（一九一三年）といった重要な書物のみならず、数多くの雑誌新聞記事においても姿をみせている。なかでも『アベル・サンチェス』ともしっかり共通する主題を扱う戯曲『エル・オトロ』（一九〇〇年）の存在を見逃すことはできないだろう⁹。

また、表紙に描かれた恐ろしい形相を浮かべた人物の右上にはヘブライ語でカイン (קַיִן) と記されている。したがってこの表紙の中には、カインとアベル両名の名が共存している。

アリアンサ社から刊行された『アベル・サンチェス』の校訂者ルシアーノ・ゴンサレス・エヒドは登場人物の固有名について、「ウナムーノはつねに意図をもって登場人物に名前を与える」¹⁰ したうえで、ホアキン・モネグロの名についてつぎの説明を与えている。

スペイン語にカインの名が存在しないので、ウナムーノはその中心人物に、アクセントのある «i» を末尾に持ち、その前に開母音 «a» を具える音声学的に類似した名を与えた¹¹。

小説の内容からばかりでなく、前述のとおり表紙の中にアベルとカインの名がスペイン語とヘブライ語で共存していることから、ホアキンをカインと解することには問題がない。明晰にして説得力に富む説明である。ホアキン＝カインの代用については前例があり、一九〇一年のレオポルド・アラスの短編『ベネディクティノ』においても、カインに相当する人物にはホアキンの名が与えられていた。

しかしながら、従来の批評が注意を払ってこなかったこととして、ホアキンもまた聖書に由来する名であることが指摘できよう。カインとアベルの逸話がかたられる旧約聖書にあってはユダ王国一八代王エホヤキム、一九代王エホヤキンの名が「列王記下」第二章などにみられる。しかし、キリスト教信仰にとってより大きな意味を持つホアキンの名は、新約聖書に含まれてはいないものの外典福音書のひとつである『原ヤコブ福音書』や、ヤコブス・デ・ウォラギネが集成した『黄金伝説』にかたられる処女マリアの父、すなわちイエスの祖父としてのそれである。

けれども、聖母は、ほんとうにダビデの血を引いていた。なによりの証拠に、聖書は、キリストがダビデの家系に生まれたとくりかえし証言しているのである。ところで、キリストは、聖

⁹ この作品は『ウナムーノ著作集 5』に「他者」として翻訳されている（一三五―一八二ページ）。しかしながら、双子の兄弟のあいだで殺人が行われ、殺人者自身が自分はふたりのうちのどちらであったのかが分からなくなるという設定を有する作品であることを考慮すれば、「もうひとりの男」と訳されねばならない。

¹⁰ González Egido, Luciano. “Introducción.” *Miguel de Unamuno*. Abel Sánchez. Ed. Luciano González Egido. Madrid: Alianza, 1987, pág. 38.

¹¹ González Egido, Luciano. “Introducción.” *Miguel de Unamuno*. Abel Sánchez. Ed. Luciano González Egido. Madrid: Alianza, 1987, pág. 39.

母おひとりによって生まれたのであるから、マリアもダビデの家の出であり、それもナタンの枝から出ていることは明白である。というのは、ダビデには、男子がふたりあった。ナタンとソロモンである。このナタンの家系からレビが出た。ダマスコスヨハネスが書いているように、レビはメルキとパンタルの父、パンタルはバルパンタルの父、バルパンタルはヨアキムの父、ヨアキムが聖母マリアの父であった¹²。

キリストの祖父としてのヨアキムが民間伝承の中で崇拝され続けてきたことを考えれば¹³、今日のスペインにおいてもありふれた名前のひとつであるホアキンは、必ずしもカインのイメージと結び合わせられる必要はない。

物語の結末ちかく、『アベル・サンチェス』第三七章で、ホアキンの手が首にかけられると同時にアベルは狭心症の発作を起こして絶命するが、その場面を背後から目撃していたのはほかでもない孫のホアキンだった。

しかしすぐさまその手を離した。アベルは叫び声を発し、胸に手をやると「苦しい！」と声を漏らし、臨終の息を吐いた。ホアキンは思った、「狭心症の発作だ、仕方がなかったんだ、もうおしまいだ！」と。

その瞬間、彼は孫が呼ぶ声を聞いた。「おじいちゃん、おじいちゃん！」ホアキンは振り返った。

「誰を呼んでいるんだい？ どちらのおじいちゃんを？ 私かい？」目の前に広がる理解しがたい状況に驚嘆しながら幼い子供が黙っていたので、彼は問い続けた。「教えておくれ、どちらのおじいちゃんだい？ 私の方かい？」

「ちがう、アベルおじいちゃんだよ」¹⁴

幼いホアキンはアベルの死を理解できない様子だったが、ホアキンはつぎのように孫に語りかけた。

「そう、死んでしまったんだ！ そして死なせたのは私だ、私が殺したんだ。アベルはカイン

¹² ヤコブス・デ・ウォラギネ『黄金伝説 3』前田敬作、西井武訳、平凡社ライブラリー、二〇〇六年、三八九ページ。

¹³ 新旧約の聖書のみをウナムーノの靈感源と考える必要はない。『エル・オトロ』で互いに激しい嫌悪を抱き、殺人を犯すことになる双子の名がコスメとダミアンという『黄金伝説』にかたられる双子の聖人（聖コスマスと聖ダミアノス）よりとられていたことを想起されたい。

¹⁴ Unamuno, Miguel de. *Abel Sánchez*. Ed. Carlos A. Longhurst. Madrid: Cátedra, 1995, pág. 202.

に殺されたのさ、おまえのおじいちゃんであるカインによって。私を殺したいなら殺しておくれ。こいつは私からおまえを奪おうとしていたんだ。おまえの愛を奪おうと。そしてそれを奪って行った。だがそれは奴の、こいつのせいなんだ」

嗚咽を漏らしながら彼は、言葉を重ねた。

「おまえを、哀れなカインに残された唯一の慰めであるおまえを奪おうとしたのだよ！ カインには何も許されないというのか？ こっちへおいで、おじいちゃんを抱きしめておくれ」

幼い子供は、彼の言うことを何ひとつ理解することなく逃げていった¹⁵。

このようにホアキン自身がみずからをカインと呼び、その嫉妬によって引き起こされる最大の不幸を完成する。しかし、「創世記」において土地を追い出され、神の御顔からかくれ、地上をさまよい歩くこととなったカインと同様の運命をホアキンがたどることになったわけではないことに注目しよう。

最終の第三十八章でホアキンはその生涯に対する幻滅と、嫉妬という自身の激情に対する嘆きを口にしながらか臨終を迎える。だが、その死に先立ってある人物の許しを請う。

「私を許してくれるかい？」彼は孫に尋ねた。

「許すべきことなど何も」アベルが言った。

「許すと言ってちょうだい、おじいちゃんのそばに行って」母親が息子に言った。

「許すよ」子供は耳元で囁いた。

「もっとはっきりと、ほうや、私を許すと言っておくれ」

「許すよ」

「そうだ、ただおまえから、まだ理性の働きを持たないおまえ、無垢なおまえからのみ、私は許しを必要とするんだ。そしてアベルおじいちゃんを忘れてはいけないよ、おまえに絵を描いてくれたね。忘れたりしないね？」¹⁶」

彼はほかでもなくその孫の許しを請う。ホアキンがカインであると同時にヨアキムであるならば、嫉妬の激情に翻弄される生涯を送りながら、その罪を孫であるところの幼子に許されて死を迎えてもいることは注目に値する。いうまでもなく、キリスト教信仰にあつてヨアキムの孫は贖罪を果たすべく地上に遣わされた存在である。この人間の暗部を深く抉るような小説の最後に、ホアキン・モネグロの許しが置かれていることの重要性は強調してもしすぎることはないだろう。ホアキンは

¹⁵ Unamuno, Miguel de. *Abel Sánchez*. Ed. Carlos A. Longhurst. Madrid: Cátedra, 1995, pág. 202.

¹⁶ Unamuno, Miguel de. *Abel Sánchez*. Ed. Carlos A. Longhurst. Madrid: Cátedra, 1995, pág. 205.

終生それから逃れたいと願った激情から自由になることはなかった。しかし、その苦悩は「後から来るもの」によって贖われたといえるのである。妻アントニア、アベルの未亡人エレナ、ホアキナとアベルの娘夫婦、孫のホアキンに見守られて迎えた死がアベルの突然の死に比べて幸福であったということもできよう。

むすびにかえて

この作品の結末に一抹の希望を見出すことが『アベル・サンチェス』という作品全体に横溢する暗鬱な雰囲気とそぐわないと考えるとすれば、それは誤りであろう。小説の基調とは異なる軽やかなユーモアもまたこの作品には垣間見られるからである。そして、それらはいかにもウナムーノらしいユーモアなのである。

たとえばそのひとつにスペイン語の地口をあげることができる。第二章でエレナとアベルが交わす会話の中に「いい人みたいだし、人のいい従兄弟ではあるけれど、あら、冗談を言おうとしてるんじゃないのよ¹⁷」というセリフがある。「いい人」、「人のいい」とかけて訳出したが、原文にある«primo»は「従兄弟」であると同時にスペイン語の口語で「お人好し」の意味があることに由来する冗談となっているのだ。

また、第三章ではエレナの肖像を描き上げたアベルにホアキンがつぎのように言う。

そうして彼女の姿を永遠にとどめるんだ。君の絵が生きるのと同じだけ彼女も生きるだろう。そうさね、生きるというのとはちがうな。なぜならエレナはもう生きていないわけだから、永らえるんだ。大理石だか何だかでできているかのように永らえるんだ。なぜなら彼女は冷たくて硬い石だから、君と同じように冷酷だからさ¹⁸。

ここでの「永らえる（動詞）」、「硬い（形容詞）」、「冷酷（形容詞）」はすべて同音異義語«dura»を用いている。内容の辛辣さとは別に、同じ語の反復による独特のリズムがここには生起している。

さらには、スペインの文学的伝統に対するささやかなオマージュを織り込んだと思しい箇所もあるので指摘しておきたい。第五章でエレナとアベルの婚姻が行われる場面で、ホアキンは彼らの「はい」という誓いの返事を耳にすることに強い恐怖をおぼえる。またその席にあってホアキンは石の招客のように押し黙っているが、これらはそれぞれレアンドロ・フェルナンデス・デ・モラティンの『娘たちの「はい」という返事』（一八〇六年）とティルソ・デ・モリーナの『セビーリャの色事師と石の招客』（一六一六年）を想起させる。どちらの作品も結婚に関係があることを

¹⁷ Unamuno, Miguel de. *Abel Sánchez*. Ed. Carlos A. Longhurst. Madrid: Cátedra, 1995, pág. 93.

¹⁸ Unamuno, Miguel de. *Abel Sánchez*. Ed. Carlos A. Longhurst. Madrid: Cátedra, 1995, pág. 95.

考えれば、第五章におけるこれらの挿入は偶然ではありえないだろう。

作者自身によって陰鬱な作品の烙印を押されているとしても、『アベル・サンチェス』に膠着した読みしか許されないとすれば、自律性を有するテキストに対する批評の価値は甚だ減じることになる。それよりも有意義なのは果敢に読み直しを挑みかけ、より豊饒な解釈へと道をひらくことだろう。それこそが今ウナムーノを読むということにほかならないし、作品に永遠の生を与えることになるのだ。第二版の推敲作業を終えたウナムーノは作品の末尾に「擱筆セリ！」という一文を書き付けたが¹⁹、そのことの意味さえなお疑問に付される余地があるのである。

参考文献

欧文

- Clavería, Carlos. “Sobre el tema de Caín en la obra de Unamuno.” Antonio Sánchez Barbudo (Ed.). *Miguel de Unamuno. El escritor y la crítica*. Madrid: Taurus, 1974. 227-49.
- Cobb, Christopher. “Sobre la elaboración de *Abel Sánchez*.” *Cuadernos de la Cátedra Miguel de Unamuno*. XXII (1972). 127-147.
- Hudson, Ofelia M. *Unamuno y Byron: La agonía de Caín*. Madrid: Pliegos, 1991.
- Mariás, Julián. *Miguel de Unamuno*. Madrid: Espasa-Calpe, 1950.
- McGaha, Michael D. “Abel Sánchez y la envidia de Unamuno.” *Cuadernos de la Cátedra Miguel de Unamuno*. XXI (1971). 91-102.
- Nicholas, Robert L. *Unamuno, narrador*. Madrid: Castalia, 1987.
- Nieto García, María Dolores. “El mito de Caín y Abel en *Abel Sánchez*, de miguel de Unamuno.” Fidel López Criado (Ed.). *Héroes, mitos y monstruos en la literatura española contemporánea*. Santiago de Compostela: Audavira, 2009. 81-86.
- Round, Nicholas G. *Unamuno. Abel Sánchez (Critical Guides to Spanish Texts)*. London: Grant & Cutler, 1974.
- Sinclair, Alison. *Uncovering the mind. Unamuno, the unknown and the vicissitudes of self*. Manchester: Manchester Univ. Press, 2001.
- Torres Torres, José Manuel. Joaquín Monegro: El vano intent de liberar una pasión. *Ogigia*. Núm. I (2007). 41-49.
- Unamuno, Miguel de. *Abel Sánchez*. Luciano González Egido (Ed.). Madrid: Alianza, 1987.
- . *Abel Sánchez*. Carlos A. Longhurst (Ed.). Madrid: Cátedra, 1995.
- . *Abel Sánchez, San Manuel Bueno, mártir, Cómo se hace una novela y otras prosas*. Domingo Ródenas (Ed.). Barcelona: Crítica, 2006.

¹⁹ Unamuno, Miguel de. *Abel Sánchez*. Ed. Carlos A. Longhurst. Madrid: Cátedra, 1995, pág. 207.

カイン、ホアキン、ヨアキム
—ミゲル・デ・ウナムーノ『アベル・サンチェス』をめぐって—

邦文

荒井献編『新約聖書外典』講談社文芸文庫、一九九七年

ウォラギネ、ヤコブス・デ『黄金伝説』前田敬作、西井武訳、全四巻、平凡社ライブラリー、二〇〇六年。

ウナムーノ、ミゲル・デ『ウナムーノ著作集』全五巻、一九七二—一九七三年。

佐々木孝『情熱の哲学 ウナムーノと「生」の闘い』法政大学出版局、二〇一八年。

